

卷之三

池鴨久吉
（イツヤク）



とくにひじりをあわせ
甲へ取巻へよつてそんと

うれしき人の多くへお見合ひ
金と申すが如きの取扱いのよき當時
多くは、おもてのくわくにてしん
てから、さくらに、よしもと
とある。おもてのくわくにてしん
りゆくかくのうち年、つづりと
うまくしてつづりうへばのうじと

アラタニイハシナリ
アラタニイハシナリ
アラタニイハシナリ
アラタニイハシナリ
アラタニイハシナリ

かうそくとをかへせしとまつた
とせんじりあうわざとあゆみ
とせんじりあうわざとあゆみ
てそしわざとあゆみわざと
ら月乃和へのうきと月
見とれいのうきと月
ておへむはつにわらとむか
きくらげのうきと月
ねいとくとくわらと月のうき
とくわらと月のうきと月
わまくとくわらと月のうきと月
とくわらと月のうきと月
やひよとくわらと月のうきと月
てこまとうとくわらと月のうきと月

せうとうのまゝに
平手 今ハ小手ハアシテ御手
又帝樂絃馬琴の中手もアリ

後漢ノ皇甫嵩傳問
忠曰遼坂走丸遼風縱棹豈云易
哉

卷之八

其中より少しおれて大手筋と云ひて

このすゝ元同友

そあまわせりまくらのすま
まくらひすまゆとくわてま
まくらはるくわくわくま
こよハ傳ひきて一やへうわ
そりうれすとがんとへ万葉集
よナスハくくとくがくとくのを
まくらのすまとくへも麻れ
くも修教めくわくわくわく
ふくわくのゑうくうとくとく
ふくわくのゑうくうとくとく

ことりきをもとめとるへぬくにまつ
こくくのうそとこまと墨一弓
や多源天すと天とえの下 駒前

名不名演

西行

ちかくまじまとくの小見のうきそ
ひうて演とてよしやわうらん

泊夜よ 竹ざくら

せらりのちののよだま
くくれすむわうちきの月

教則有効

論語陽貨篇

一大事因縁

法華經云世尊唯以

一大事因縁故出現於世

今日のことをやうさんとてわるは
ええてあてずしもとくわるは
さくりうそとみのりなくへまう
多めのゆめのうきへまうてまう
うつとてやうとうく
おりつとてやうとうく

吉日本記よりわづかよ

さう おまかせのまへにわざ
を承りもつぬいとひそむる
心事

まわるは風の吹くやうに
まわるは雲のゆくやうに
まわるは鳥の飛くやうに
まわるは魚の泳ぐやうに
まわるは馬の走るやうに
まわるは車の走るやうに
まわるは船の走るやうに
まわるは火の燃ゆるやうに
まわるは雪の積むやうに

えへほれのゆく入ねひとす
まよまよやとをうもとひの眼
孔眼ととれまよとす
ゆすま車いとにゆとくひと
アマア湯よ沐のまとさう
沐浴シム

すうつ 奥よ入よと今をや
りあつるのむとすくみ
はなといた事もとんじとおの
アモ一モヘタヒトシモカモ

アキアリナガホスモの
日引わ
セシムシモのまくとるのあまく
まく

ホホキモ ちばめかまく
シシムのくととくとてまきと
もうと思ひんかわうぐくには
まうぐくの秦うつともうよそ
まうぐくのうへりうぐくのま

愚人カトク及大知カミナリ、莊子カタマリ小知カノコ不
又曰大知カミナリ間カニ、小知カノコ間カニ、

注、向、向、言、智量、大小不同也。
賈生服鳥賊小知自私ハミ、賊彼シシ。

百工（一）尚書五子
之歌（二）視天下愚丈愚婦（三）一能
勝（四）予

文字の法師 晴隆の経師
立暗證禪師 謩文法師ともも
うう文字法師の最初とうらうて
坐禅とももく晴龍の経師を

坐待子丈と事にて教相ゆ

をくのとくとくの眼(まなこ)をあら
まかでわざくはまじへが人のよに
そくそくとくまく(あ)んとくも
まわるよまくわく(あ)んとくも
りまかくとくまく(あ)んとくも
よゆく(あ)んとくまく(あ)んとくも
く(あ)んとくまく(あ)んとくも
く(あ)んとくまく(あ)んとくも

てわざわざのうへのまくらをも
とろんとそよがのうのゆとりん
ゆるやのうもうと佛
はりとすこし人ひあらん
ほどのことく眼 賈誼鵬鳥賦
通人大觀ち物無不可 法通一作

わすれぬゆく後とめて 一天
吹く秋ハ万大吹フ声ニ一大傳テ風ヒ一万大
傳テ實サツわくわくする竹笛チヂキの音おと

陽をひくふううきよよか

卷之三

又々々々々
年年年年
壬午年
丁巳月
己未日

又のまゝ、そえゆうく
かへりて、船而未決之人に
船の水をま

又少一の推

不知之爲知之

一毛論鵠而色莊者，

物のまゝまゝ
往てえきくう人よもよとれ

豫々云々の意も少く

又如《毛氏》所引，
以鐵作門限鬼柏，卒而笑。

又

者卒

宰へとの也

天眼第一阿那律

三千の衆シカクの事のとれ毫
摩莫とみうりと淨名に

中庸曰治國其如示諸

掌辛

或へて紙をへもとくうきうきく
袖はよしとくもんとくもんとくもんと
四半のあよさもくもくと紹んちろ
かわのくつづくもんとくもんとくもんと
おれ写三と人もくとくもくとくもんと
まくくつとくもくとくもくとくもんと
うちの紙のとくもくとくもくとくもんと
のとくもくとくもくとくもんとくもんと
ゆよりんとくもくとくもくとくもんと
久義通基とひ殿吉の事

久義通基

通基とひ殿吉の事

よあらやう今ひの紙八重う
のあらやうとんとく

まよひの紙興るもののもまうね
のすのせはのふくまう
の敵も序とてりあくとくれくと
ゆ門お出仕事よて警蹕いづけ
へんこやくとくとくとくとくとくとくと
きよりあくもくとくとくとくとくとくと
相國少とわくとくとくとくとくとくとく

もれりうきしんせんの惡鬼と
そよぐかしゆれけにまくまく
東あすへ神興と日當へあつてまつる
あもしよゑ

事寺のあくや

の敵 ことのほのえれんとむく

ひえふとくねく

湯布有河海

又喝道前可警蹕 ふるまづかふ
くあ言よへ叮咛の二言のうひも

トクス

おゆのあ幽

庶流

警蹕

前漢列傳十七梁孝王

得賜天子旌旗從千乘万騎出

稱警入言蹕注師古曰警者戒

肅也蹕止行人也言出入者互文

耳出亦有蹕漢儀注皇帝輦

動若侍帷幄者稱警出殿則傳

蹕止以清道也韻會蹕本作蹕

諸事のうまひ　奈存人すまひ

アリカヨシシトヒトモセラシ

也カ　ニシマヘ地　一千よ少抄

カウシ小叶のカ

西宮の尾　西宮大神

明る代作

法寺の僧乃シモアヘ定額ハ彌
ヒツクスニ延至式ヨリシテアリ

ムノの通考よ

定額　續日本記文武天皇大寶元

年八月皇親奉滿者不論官不
省入賜祿之額　弘仁文曰古收官
府禁り京畿内諸國松作
伽藍寺右年勅定額諸寺其
額有張私嘗作先院立例此
本所司寃縱曾不糺察如經
半代之北不寺　十八史畧ナ七

元以耶律楚材言始定天下賦稅
上田每畠稅三升中田二升半下
田二升水田一畠五升高稅三十分

之一立戸出絲一斤以給諸王功
馬湯沐之賜一擔每銀一兩四十斤
永為定額

以定額

(唐志)

女孺

禁御批云多不着衣只小袖

唐衣以左道姿而潤皮觸年

上ト格子奉仕毛敵人等如在不

免死也而中掃除指油役女孺

不罰

卷之三

五十卷

延昌年中古大

臣忠平勅太子博士

之子

楊名介少

而楊名同

之兄

名介

源氏之子

楊名同

源氏之子

之兄

政事要畧

百三十卷

惟家亮

撰記云勢文舊紀彈雜事至要臨

時雜事等

桂川の行宣は第下うらやまの唐もと
呂入曲より律の名より和田の草
律の國にて呂入音よりとアリ

り宣は下

奴のゆきあすと云

不^レ良^レ行^レを

律呂 或^レのい^レ呂^レは^レてや

ア^レの^レ律^レと^レてこ^レ

貞^レ年^レ唐^レ人^レ音^レア^レ和^レと^レ

モ^レモ^レ日本^レの^レ人^レを^レ律^レと^レ

酒^レ渴^レア^レシ^レモ^レサ^レア^レえ^レ律^レ

呂行^カトモ^レモ^レリ^レ行^レハ^レ事^レの^レう^レめ^レ
満^カトモ^レト^レヘ^レ行^レは^レ多^レの^レす^レも^レ
テ^レ社^レう^レく^レト^レハ^レ行^レづ^レ

行^カ音^カ番^カ定^カ名^カナ

岸^カの^レう^レま^レ月^カノ^レそ^レれて^レ
う^レせ^レア^レ佛^カの^レう^レか^レま^レれ

印^カ滿^カ 慶^カ庭^カハ^レ海^カ 唐^カ干^カ祐^カ得^カ印^カ

海^カハ^レ兼^カ願^カ待^カ

に^カ多^カ 芥^カ芥^カ云^カ南^カ殿^カ北^カ九^カ間^カ四^カ面^カ

退凡下ホの車都傍カクシテトモ
内ナリヘ退凡ヤ

西域記九云以來而世主五十年多
居莫禱山廣說妙法摩詞陀
國頻波斯羅王為佛法故與數
人徒自山驛至峯岑跨谷凌巖
編名為階廣十餘步高五六里
中路有二卒都婆一謂下乘即
王至此徒行以進一謂退凡即
凡人不令同往其山頂下乘ハ王

八車ノウカヨメニテシハア車
都婆トリト末ハコトヨウスル
少ナリ退凡ハコトヨウスル也
モカヨメニハモトヨウスル也
リカモトヨウスル也而月後社ハ祭
作ノウカヨメニハリヨウスル也
ノウカヨメニハリヨウスル也

多例もうち十月諸社のり事も
例もあり能むるへと書く
御言葉 貞治の花藤沢山東門
由阿ノ万葉集乃注シテ詠林
宋葉抄とぞくちの本六云一天
トハ神ニ月とトモニ也其日トミ
神ニ月とトモニ也其日トミ秋朔
の詠神よりうづりにまゐる
やうの神名トモニ也其日
の時小童のつまうりきうり

舟波とようす。かくとももくも
詠歌ヘソリスハ神をれやうよ
りうらきとておはすうりぬ
ひ神をれはいふもひとくみくよた
らえ神乎依人の神トモニ是則
は矣ハ神トモニ大社トハ神
奉ハゆ神トモニあもとハ國曹
じよもろ社ハそくへどもとを
とあ廟神うんへむる故ニキ

らとひのむとせとせ船水にてま
わらまくといふる事わうそん
を細川妙のりへト部流介水
ソシムロドモハミツ鳥のひれ
ますにキ十月に三月より十
月ニ素盞鳴てつみくまくまくま
と勒へまとうとくとくとくとくと
書國すもくまくまくまくまくま
水三月ニヤリヒクヒクヒクヒクヒ
よそゆよしれて御事と云へ
ミノアラムレヒトアマ流あ
ガルヤウタヘヒ後とすよ
リ、十月シ陽月と名づラキ
陽ナシヒトススケル雅^{シカ}
シモウリナ月ヘシテ一陽来
後すうがく十月ヘ陰陰ヒ月ナ
キとシ陽月ヒシテ陽の果テ
終モクシテ水通^シリ^シ陽水か
天月ヒシテ水通^シリ^シ陽水か
ノ料簡すくとく

諸社八日幸

拾芥云松尾寛和元年十月十四日

北第

寛弘元年十月一日 直吉

直九日

勅勅乃而よ勅うる御まとへえ
もまう人うすごとの印はんやくせ
の中のさとへえ時へふるの天子
よゆらとくまう勅馬よゆ天の明
神そりとも勅もくまうくまう也
者背長の負うるやれどその家ふ
きくとれんもくひのうくまうそ
のう今代せにへ封ふつるトよなう

ゆう

勅勅

天よりへんばく

勅

岩室一名よか又

山谷詩倒勅

収蓮苑こゝへとまとへみのわざお
定う矢シ入ルトい。御う 日本紀

神代上天些ち神背負千矢之勅
立百箭之勅こゝ矢龜(今ハ平胡)

勅

事のそへとくとく

对氣疫病の

ゆう

立条天孫

め慶名命スミヒコノミコト高

皇產ミムスガ天ミコト立条ミコト人已ミタナハシ責ミツメと天下

と経ミテて度痛ミタニと流ミタマすとんミタマる
とミタマよ 日本紀ミタマ第一ミタマ立条ミコト人已ミタナハシ責ミツメと天下

りミタマて立条ミコト人已ミタナハシ責ミツメと天下

者督長

轍原ミタマ云ミタマ檢非ミタマ遠使ミタマ

此云ミタマ使ミタマ履ミタマ本
取ミタマ敷ミタマ更ミタマ體ミタマ

當使補ミタマ者督長ミタマ六十六人ミタマ此ミタマ爲ミタマ諸

國ミタマ也

立条ミコトとミタマもミタマとミタマしてミタマのミタマ持ミタマ是ミタマよ
やミタマのミタマのミタマ持ミタマ是ミタマよミタマ持ミタマ是ミタマよ
らミタマはミタマもミタマいミタマうミタマ下ミタマよミタマもミタマうミタマ今ミタマ

立条ミコト 非ミタマ不ミタマせミタマん

立条ミコト

和名ミタマ云ミタマ唐ミタマ令ミタマ之ミタマ答ミタマ

音知ミタマ智ミタマ名ミタマ之ミタマ答ミタマ毛度ミタマ

大頭ミタマ二分ミタマ小頭ミタマ一分ミタマ又ミタマ云ミタマ杖ミタマ

音伎ミタマ和名ミタマ杖ミタマ

都志ミタマ皆削ミタマ去ミタマ第ミタマ目ミタマ長ミタマ三尺五寸許ミタマ

拾案

王篇一榜苦老切中

以殺山本大師 今んやの起居云々^レ
へ急患傳を書りてあらまうやうに
文ひつゝト は嘗よへそひりきすい
のを代もとて起居よほして
わざひまくぬへすととくがひす流
布もくろ(又は今よへそ)よあらと
とぞくと入ゆるをんまく

大師勸善記

先享釋書之釋良源

始木津氏也列。淺井郡人也。延祐

十二年九月二日生季十二上穀山
師事理山延巳六年礼尊意登壇
受戒^{スル}康保三年八月補^ル天台座
主領山務者二十年天元四年為大
信^{ヒトシ}氣^ヒ法^ハ勢^ツ總^ツ華^カ車^ツ永觀二年
正月三日唱^{ハシメテ}詠^{ハシメテ}而滅^{スル}年七十四
賜^ム恩惠^ヲ鈎廷^ノ恩惠^ヲ大帥^ヲ云^フ傳教弘法^ノ恩惠^ヲ

北山集

法曹

ゆきかとつは法曹とほ家

体令シカウのもとで

カムカム法曹至要抄ニシテ

カモウリ

徹家

まくは今よへ えもんあ序もく
いりうるよよをんとてと天化
のあとうれわすりいまとせん
こさんそのゑへ徹まくつまく
れもんじんひくへしむらんじん
とくつてゆひきよもつひのく

ざくのくまゆりくにくたく
くくくもせ人の内火と
忌トのむく 後成恩寺殿 日本

紀纂疏云水火ハ天生之物無分
染淨而補事忌火何也曰火雖毛
淨用物而穢故不食炊爨之物而

已

法曹左右と名復捨也医使の別あり
時中口して役所の許定わふん
ううう官人章系ヤナガラ牛ウシのとて

庵のまゝへて大抵の名のなかの
の多くはのうしてさんじゆく
外すうううわざにはまぢゆく
うと清湯節のとくへはうつまき
牛よふあうり三あきへこうの
りうきんと金鰐の宮人あめいもは
ハ激半とくとくえやくとくの
きくとへうへきとふくうわきとあま

きうきうときんかうとくともや
しむりうらはへりやううううてや
るううう

唐木とす

五考

彼履

久ひのひへりへり

官人

わきる

大羅

えのりへりへりへりへりへりへり

もぬゆ

よしらえ

本草綱目、船草

一名牛轉草即牛食而後出者

俗曰向瞧。和名曰爾雅集云。獸
吞葛噬反出而喰牛曰船。郊牛
八口齧之。或曰。角。或曰。頭。
或曰。耳。或曰。目。或曰。鼻。
或曰。風。或曰。毛。或曰。皮。
或曰。毛。或曰。目。或曰。耳。
或曰。秋。傳。人。或曰。火。或
曰。土。或曰。牛。或曰。陰陽。抑。或曰。
或曰。或曰。

文の初回

云考。又。改。今。多。奉。
足。也。と。へ。そ。く。へ。う。の。り。く。さ。ん。性。理。字。義。
云。大。抵。妖。由。火。興。凡。諸。私。鬼。神。之。旺。

皆。由。久。心。興。之。人。以。爲。靈。則。靈。不。
以。爲。靈。則。不。冥。人。以。爲。怪。則。怪。不。以。
爲。怪。則。不。在。伊。川。尊。人。官。廨。多。
妖。或。報。曰。鬼。擊。鼓。其。母。曰。把。抵。与。
之。或。報。曰。鬼。打。扇。其。母。曰。健。熱。故。
耳。後。遂。無。妖。只。是。主。者。不。爲。之。勸。
便。自。無。了。細。觀。左。氏。不。謂。妖。由。火。
興。一。詰。說。得。極。出。明。道。石。佛。放。光。之。
事。亦。然。

狂弱の言人。章兼とひと顔會。狂。

烏光切跛曲胫一作屈或作屈亦作𠙴荀子賤之如𠙴注廢疾之人多有之也

鴟

千金方
壊ル

毛ひをとてしもんとてせひのれ
くちよくまのうへねまへえ
うちうちまうらふはくもくうこゑあ
みうううとひとくとく

急事

萬の事へそへえ

ひめ 前後れまちこ
まちわんま

あともじうるの國
うる冠の身りりん
星形のゆき
俗よ冠
ホ。様^{ヨウ}。云^ク。た侍
神の聰明^{モツコウ}而壹者^{モツコウ}(蛇の)

アミタモトモラウ若れとももく
もあり狂野^{ヤハラギ}洋^カ

絶えずれぬゆよとト^トく
ト^トくしてこすしのゆりよの
のとくとくのよしにあらうづ
のとくとくのよしにあらうづ
弘兼^{ヒカル}傳^{トシ}とくとくのよしにあらうづ
のよしにあらうづとくとくのよしにあらうづ
のよしにあらうづとくとくのよしにあらうづ

ゆきゆきあはれにてやうやく
まく人ようんゆき

人の怨み物をもひのよさを
絶えぬものとしとぞれとて人
とほりてくらへん人ひそかにと
ひとりをしてゆるとそへゆる
あひいひくくつひひるとし
あひそそのわとてもめく人まもと
つらがれにもよせんとよめく
あきれへゆくとゆめく

うとうとううううううううう

世流新後補十二云注疏名牛ナ時
徳文書寢曰共偷帳藥酒其文时
寃且寢以觀之毓紳而後飲會
而不辨既而向毓行以辨毓曰酒
以成礼不敢不辨又向會行以不
辨金曰偷本非礼所以不辨異
本云孔文奉有二子大者六歲小
者五歲晝日又眠床頭盜酒飯之
大兒謂曰何以不辨答曰偷那得

行礼

と鳥へまかねりとくとくり
ていのうもとくらへてもうやうみ
くわらへすまかせんとくよくともうく
とく招鬼へはくわくわくうの事あり
已是へ鷲うり万葉集のちうよ在
あらわにまくはなはくはきうり
鷲鳥と喫子多いとくゆゑの

喫子鳥

古今集ニ鳥へもしてある

ノヘ那知

招魂法

楚辭注曰招魂者宋玉之
新作也古者人死則使人以苴上
服升屋履危北面而號曰皇某
後遂以其衣三招之乃下以覆尸
下署之入之のののののののの
ののと秘けたる言ふれど招會
以卒曰招以云曰召

鷲

鷲うり和名云唐韻云鷲空

漢語也

云招江惟鳥也海篇云志其名

人の志をもれどへん心をもゆと
もあらのしよへん徳をすくわ
よし人とも多くもるへもううへ
もとの心うぐれへひなたのう
げとくさへおとくとされへきと
ひでくたはだもせくへとくと
れりすへうへうへうへうへ
やよきひわきへやうゆへ
やへうへうへ一毛も換せんくま
毛毛へ是へ毛毛へ

性の如くのうへ寛大へて、まことに
らうやう時へ、我心も小さくもゆき

卷之三

感應りうそ

秦人始皇之教（三略、原者也）
則老藏（又曰藏多，則身
敵）ツラク

國老贊し又曰威多則身歟
阿房の昂鑄玉石金

塊珠礎也子羽一炬火驪山三月江
タウリテ 莊子曰孔子再遷於魯
窮於齊伐樹於宋困於陳蔡不容

身於天下

孔子曰：‘知我者，謂我以己；不知我者，謂我以不己。’

徳わりも

五

都曰不棄勿失
終令下而死

後回不幸

史記ハ韓非傳ニ衛

とて殊やうとく又楊志尤國忠の事

と引て馬嵬に鬼となり
奴もくらうとて 彭憲梁雲 柳
云權 張之定 やまとのしまねを
くわんへ
人の志とも 元士卒つとまつて
てくわんへみことりうすらと
甚多く 朋友のうしゑひ
ゆくとあひくわん 張平陳餘外
頃へまとしこひくとも忽よ歎
きうて張平韓信と曰く陳餘と
教と又朋友の道始終とりうすれ
たりとく朱穆段文淪ノ化ア刈
考標庚段文淪と化ル
もがくくわんへくわんへ形くくわん
くわんくわんくわん はこう連続もくう期
をうくうくもくうくうゆくく
くわんくわんくわん 山谷作東坡
贊曰其愛之也引之上西板塗
坡是亦一東坡非亦一東坡其惡
乞也投之於親鄰之波是亦一東

坡亦一東坡

無事可憇也。而後人之爲之者，
又復不知其所以然也。

庄子失過爲輪扁曰徐
則耳而不固，疾則苦而不入，不徐
不疾得之于手而應於心。

一毛不拔

孟子曰楊子曰我
拔一毛而利天下不與也。列子曰楊
朱曰古之人不損毫髮利天下不與也。

人不損毫髮天下治矣

人之至德の盡く。問書，秦檮，惟天地
萬物父母。惟人，萬物之靈。蔡氏傳
云，天地者萬物之父母也。萬物之
生，惟人得其秀而靈。具四端備
萬善，知覓，獨異於物。而聖人又
得其最秀而最靈者。孝經曰
天地之性人為貴。孔安國傳云，先生
天地之間，含氣之孰人，莫大老子。
天地之性人為貴。孔安國傳云，先生

宋陸子靜曰

宇宙吾分內事 又曰天北行所
窮 人曰東西海聖人同此心同此
理南北海聖人亦同 又曰人有無
窮之事

五怒毛小さづし

論語曰顏回不

過 楚程子曰顏子怒在物不在己故
不近 又曰喜怒在事則理之當喜
怒者也不在血氣則不近若舜之
誅四凶也可怒在彼已何與季如鑑
之照物妍媸在彼隨物應之而已何近

之有

秋八月ヘミツリミツリテハル地
ノリトモ月ヘミツリカキシテハル
ミツリトムヘキアリハクシラス

改陽曆號月清序月之為號冬則
繁霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月
方侵以蔽興侵俱害號秋之於時後
夏先冬八月於秋季始孟終十五於
英又月之中皆於天道則寒暑均

取於月，數則蟾兔圓。況埃壘不流大
空，悠悠蟬娟徘徊搏。華上浮雲東
林入西樓，肌骨與之踈涼神氣與之。

清冷

人向東北去
日久史

火
焰

卷之三

因わうま夷漢^{イハ}にて後より
てとどかのくと來や
平宣可相^{ヒタチカサハ}もへ後しやまう
あゆ寺入道^{アヤシマツル}のまひよ
おも^シふやくとくも
ひきとくやくとくも
アキモ^シとくやくとくも
ちきんへくやくとくも
はな^シく^シま^シく^シのま^シ
ゆく^シく^シあ^シく^シを^シ
てりてりこの角^{カツ}を^シ
らる^シれんへ^シは^シく^シこれ^シ
きわわ^シく^シと^シく^シと^シく^シと^シ
わざん^シの^シと^シく^シと^シく^シと^シ
と^シく^シと^シく^シと^シく^シと^シ
うけ^シみ^シの^シか^シつ^シと^シく^シ
そく^シく^シの^シと^シく^シと^シく^シ
にま^シく^シの^シと^シく^シと^シ

平富時

大佛演興守

東邊云

治十五年自弘安十年至正安
三年北条又昂時後改富時
系圖云對改時房明也宣對執權水

恩寺友

西門も入

時和とよひえ

もや

黒井

じよじよ

西門

もやのくえと

寂明寺へ通鶴の巣の社家の次で
よど川に鳥入のゆゑ先づひと
つりを入とすりありよわじ
まきわづりとむね一畝のうち
うの二さんよかとまくよひも
いそやんとよひてひよま

つる年そくをあくやくのふそく
せうれくりじて奉るにけり三利
へそりゆつてまくらのゆき
と用意してゆくゆくもとのゆ
めうすすめでかたとよ小袖よて
くわいきてゆくはくさんれくうみ
せんぐ人のうどてゆくゆくゆく
ゆく

彦

事體中一云後冷あひ八時伊
藤も源朝に松義寺勅伐安賀

住時有丹折之旨康平六年八月
潛勸請石清水建瑞難於當相
模國由比郷今号之
下着承保元年二月
建隆奥守又加修後治某四年
十月移明魚小林之北山掩官
廟被迁之

足利大馬入道

東鑑四十四云建

太平年十一月足利大馬入道正義
病惣已危急之間多訪之相列令
向彼第給二十日入道正四位下行

左角以源，即高義氏。法名。辛。原高云。號。入者。至唐之。

孫、玄、繼之父母。
小弟時政之女

わざわざと 饗應こうどう日本化
して居たとあるこより俗よもて
なまくもじ

一獻 亂記。一獻之礼賓主百絲。曲乳。
君子之飲酒也。一爵而也。瀟如。ニ
爵而言言新。三爵而油油以退。
うららかの 順序ありゆく

隆弁集。鶴をあらはす。家主の軍

沖不倒之對致。行禮。初。依。勤。
驗為恩。夷。拜。从。美。流。國。若。淹。鄉。被
任。信。正。

わざわざと いふへんがまくと
やまくと いふへんがまくと いふ
はまくと いふへんがまくと いふ
ます。えのうづひとと いふ
もと下さり。えのうづひとと いふ
もと下さり。えのうづひとと いふ
もと下さり。えのうづひとと いふ

とまことに朝すとおれも中の
月を沂河の事の月と云ふ
と人の心があつてはよつきて可べん
お重なる欲ももさうてあらぐ
とらぎんとゆゑて萬の縁わうと云
とももうとほとへて整を
やじゆく時つゝ幼わうとさう
り成とらうとせりとおもふ
くるへてひるがつてまくらと
わくねとらうとくとおもふ
とまことに朝すとおれも中の
月を沂河の事の月と云ふ
と人の心があつてはよつきて可べん
お重なる欲ももさうてあらぐ
とらぎんとゆゑて萬の縁わうと云
とももうとほとへて整を
やじゆく時つゝ幼わうとさう
り成とらうとせりとおもふ
くるへてひるがつてまくらと
わくねとらうとくとおもふ

新文一
の

晋，鲁，麋，錢

神論曰親愛如兄字曰孔方失之則空乏之
貪弱得之則富強無翼而飛無

定而走解巖穀之顛用難安
之口後多者康前後少者居後
火のうつよづく 易乾卦曰
久流溫火就燥雪從竈風從虎
孟子曰行水之乾下也

寫飲夢々

善樂女色

而有口之云

抑人

毛手口人也而內

と畜てえり未兼好、渝論語注云枯及瘠

猿々とくと月のさしんへ

後漢のる

伏波、守護ト奴

之治、浮屠

氏よひこと有財鐵鬼と云

疤痕と病の

負傷と不

貧老へ歟と未

もく（弟と弟への以宝多め
としむてもしのと負老と
吳うへとくと負老と是トと
をとくと本樂の因とて古人よれ

究竟に御用よき

天台家よ六

即ち

理昂名字昂觀行昂

相似昂分身昂究竟昂モニ理
昂ハ妙法乃多事アリモ薄
地座下ノキナマニ至畜頭ナシ省以
性ノ具モソリソリ名号昂佛
法トソリソリトモソリソリ觀行
昂ハ坐禪修行すシお仰昂
仰美座ハリヨリソリソリ身
昂ハ良善ハ位シテ衆生濟度ハ爲
よ麥根トクニ充竟昂ハ妙寛仁位
如來地ハ佛モリヘ凡ミケ一切の

物との執ヨリヨリテ恚皆似性ナラ
ト究竟ハ理昂ヨリソリ悟ア同
未悟ソリソリモアヌシ又ナ有無成
佛化什麼爲迷倒之衆生トソリテ
大欲ニニ欲ヨ似アリ 聖教總錄覓

十九曰欲生則三戸生欲滅則三戸
滅故至人曰欲者不欲不欲者欲
安智怪貪ハムカ皆欲除シテ一紙半
纏トキナリトモ後生ハシメヨアマ
アセ令納ツツハヤトイシムされ

極樂よまれて食むり室よ布
而味の飲食とくらむ樂にまんあ
くわうゆふ今生こそ布絶と
すとよ被よ便う

孤のくみのつゝくま（堀川友と）
人、我もまた孤よくらにむかそ
すやむりをとくは下トは師ト
孤ともかづマスのつゝれへりと
わくえとあくわくのくまのニセ
とほくもくいはくうううニハナ

ぬは師へあまく而くくわるく
ゆううううう

堀川友

久我、一门基具を歿大同寺

堀川友、基俊大納言、文

本寺

に和るとつて一絃

キモトスのに和すよりひのきと
ひわうゆ守の四絃うゆつる

今も本寺第とモとお安寺も
後城へり。毫もたれサ西のやまと

りり第ともすの五傳とつうは

田永萬の令やられていつか秋へ
歸よそりてへ廻んとる所も(先
日)あつていい(種)魚の(立)て
りて主(お)ねりもそれと(立)て
た穴へ(立)て(立)て(立)て(立)て
立(立)て(立)て(立)て(立)て(立)
半(立)て(立)て(立)て(立)て(立)
半(立)て(立)て(立)て(立)て(立)
網(立)て(立)て(立)て(立)て(立)

ゆうりんを細々と見て中をもん
も見て、中とひとのりひよお仕事
わくわくするから、小物一律とつまみ
引くの完璧とからしてしましと
りて、もとらぬくほどの
うきへこひてとくとんへ心のくわを
わくわくするやうにあつた
とよと料亭のひきゆきと、最も
珍奇を後手とゆくもの

久々見ゆるにヤヌ

空氣莫門
空氣人

詩秋

秋　　吉原氏衆人の笙^シ吹き事
にて、豊^{ブニ}のらくご統秋^{スミ}うえに従
ひ名氏^シ吟^シしてゆふ

經志
卑下八初

卷之二

十二律 もももひのくはんよわくの流
えくくんくらんをもとみゆき

後生をりまく　偽強子平萬子曰
後生丁畏事知來者之不無今
也

系承　本末氏八橋氏の子也
さうの小姓とももあ次比トの
審人

呂律人也よもへづるも　首楞嚴經
曰譬如琴瑟蓋因是雜有竹
音名无別精終不絶寃汝興衆
生亦復如是

かくもとをもへづるくわざる
きれとも天もの萬樂の如きも
すゞへてんこしに給人の如
萬寺の樂へ　國ともあらそ
やれゆきそぞくそめりりゆき
かくもそれゆくゆへもるへや
すの圓介にゆくとくわといひゆ
と射宣ひるの施うすのあ葉落
網りきらうからきる者ふみのてあ
まとうまく人未だ二月御さん會

天王寺 椎古天皇入學す。皇子太子
達多内村國信長廣目。天の
像と安置す。りへて天王寺と云

伶人 王樂すり者と云高帝の
時伶倫といふ樂人ありよしら
後世よ伶人とも

六時堂

八月十五夜

ハナヨ 滅須

あひるよてく月の水をもと
今やく秋ひをやううう
涅槃涅槃 二月十九日
至是去 さうの忌日二月廿一日
のりとのあともとのへ 尚書尚書
八音克詣八音克詣 菩薩菩薩 総集論
事常代調す 平昌年間より紙堂
もくやひのあらりをきひの
えり

紙圓精舍の主もと院 大藏一覧
中二云佛大檀越須達多長者
達之達之 紙陀大子ノ因と須達り
りえて達之故紙圓となり

西園寺 桔芥云衣食是良也收大
呂云經云經也

津金剛院 つましのものづまの
東三四経あり 桔芥云本名天
安寺待賢門院印達之印達之 津入字
とはどうすやうに金剛院を居

秋推野より

建治弘安のばへ多の日と致免へつを
わよもややうう紺の布宣彌もて
馬とはうそて尾髪よへどもさす
てくもれせしもとよ千よつとて
きりづきのひてこまうりゆつひよ
んかのけたすとも興あつてももあ
つらうてくわいもくまほも
うの今日もくうりゆうりひもく
ひきの半とまくとまくとまくよ
りうりうりうり

建治弘安　省後室多院八年予
もううへ　かくふうううへり

致免　重慶二十三、建保六年六月
侍軍家宣朝任大將、馬緋旗、參鶴
置、院長に判官絹花布衣冠革、
緒袖タツ尻鞘タク太刀帯小三人雜色入

細密懸一人放免四人

乞を仰ぐにあらうも平よはまとう

心

くわのわよわきとも馬へつゝ
わくわくくく人のみのす

隨意とし

獄原下 檜原邊役下

よ逃志る 明洪送革 六位時仕
馬志郎家 使宣旨 乞志者
生引使廳諸工事之故以次而送
馬志郎家 使宣旨 乞志者
馬志郎家 使宣旨 乞志者

八使廳の志とさうをもたまうの
志とさうと逃志と云ふ

つともう まれん付とさうやめの
ゆじと承放免のほとさうとわく
えり

已看

衣服車馬少く多く皆金よ

已くらめ

竹谷家新房東ニ承廻（奉うれむ
うれむておれ逃若よへりす晴利
ひりすとくうのアセラシル、先明ま

言豆籠下池原尼と曰ふれりうな
とやふるとといひてへんぐく念
佛よまのうしてりうゆき
トシヌモルくとせと、我宗うれしさ
トシヤハモリトトモ、
く梅多出後よ降して巨臺うえ
くととよくはえとへん及ぶるこ
ゆみくわくくもくとくとく
くいがよんとおひで木陰を
多くうよつまくひもま池原尼

とへづづきうくよくねく

行谷

東三室院

主筆并お國 実氏

印忠女ふるやまし 滋涼るる院の

后也

光雲

沙石集二ト云體體乃

行谷に主教房のとくへ津ふある

通とせん天て魂乃善哉とぞ

ゆよへらへばすれくらし勅宣

りうきうよへ宝籠昂近原尼光

毛詩大雅小雅頌賦之

身のまことに思ひてゐる

鶴大臣文

余の太府基也云考鶴友又号砂
金太白友井蛙沙小毛丸

陸奥守より家入道の事の如
てあるまゝである。まことに
ひきのひきふむちうえすあま

くまもとやまのまゝ
れんじりそらのいがて
みゆきのせうとくらわう
ゑぬくにのじるのじよ
ふとんすのむかのくわ

有文選

安信傳的十八大之後

吉重の子や陰陽の以て仕合

論語憲問篇禹稷躬稼而有天下

中庸人道教改地造紋树

多々ゆうよぞうへ西恩入西事ひ
れゆふ無むらすととととて取
玉經師といのくわよよて年を
くもすすひつんよりくもとさ
りももととし奈へうりえんへ
年とくいのくわ經師しもとめー
はくとくれの鹿くはほくもも
もじのうんぐりうね井の年經
ときのくら源先行かものと
あくへくもくもくと
多々ゆ
久資と書ゆうやう樂
人へ多民へとととととととと
多々大百姓もももももももも
森木名地よへ多社とく木武帝
子神八神平令ハ多民のを組
通憲へ通
サ内言入通信西ヤシ通
よ西すまへ

研經師

東船六文治二年三月一日

預列妻靜及母故存即自京來
千鶴舍一下宿之

ウツモト もやまと

佛作のしゆ

経作の由来縁起

白楊の根本

唐平盧襄紀十七云

やまもとやまとしとつをのあり(漢家)

の虞氏やまとひ王昭君(もとい)

の宮え白楊(めぐら)御名よへ

多那院中(おとこ)小治の千家君前と

て二人の遊女(うきよ)りうちうト始之

ゆく光行

円守と監(もん)ゆく氏(うじ)也

ふ(内)木と云(い)ふ人(ひと)也(こ)

亀荀

東鑑二十五(朱久三)年立

月(未)家持天氣之起依(は)歸女(め)

荀申狀下略之

亀荀と免(めん)からく

ソナリ

後鳥羽院の符(ふ)佐(さ)吉(きち)長(なが)智
右(う)へ(ひ)すれも(も)れ、樂府の(ゆ)徳(とく)
乃(の)ぞ(ぞ)に(に)そ(そ)て(て)酒(さけ)と(と)あ(あ)る
と(と)き(き)う(う)ざ(ざ)れ(れ)ぬ(ぬ)徳(とく)じ(じ)や(や)ま(ま)

とほくひのうれとひまくよめてる
のとすくさんせもくうりきくは意和
あ一庵わくまのとへ下部もくじ
くしてうり波トセウカモクの
住居入道と枝原トムクヒ行長
を平家ゆきとほくうて生佛とい
くう育園みくうくうくうくうく
ひくひのととととととととと
マ九帝判官アキトヘモウモウ
さかさくう蒲^{カバ}タノヤハナノハナノ
ううううやあらくヘトとととと
りくうま士アキトヨラ馬アキトヨロヘ生
佛系國ハキトキトキサヨトヒシキニ
カセクチリキリキリキリキリキリ
希トケル良也^{ヨシハシ}トマツハラト
住居前引行也

藝古の筆

藝古の字書亮典よ

うう又後漢書も桓東曰今日最豪傑
古之才也是二字のへ力と云也

樂府

古樂府あり新樂府あり文機

よ樂府へ詠すとのせうり元稹集
曰居易集等樂府へ詠甚多く
名流考定と樂府伎女とあり又
樂府新錄云々ともあり

七德草

貞觀七年正月更名

破陳樂曰七德草ト七德老畫取禁シテ
ホウジ載無保大定功安民和衆至賊
之表シテ

一氣

退之進字解名一氣者無不

庸ヨウ

ひて山門のまと

急従よりとされ

あゆく下ゆる事うへ

九節判友

表序

浦冠

江立位下二に守範ヨリれ於

を川瀬生即リヤマ出生之号蒲

蜀老輕朝アラタ

六時礼讚へりて何んと人の中より安樂と
いひのうち傳仰みとありてはうりゆ
はくすくさうくさうくさうくさうくさうく
居とも信すことをとらへりてあ

明よりひきり一念の念佛の事切く後
暖簾院乃つ代りくすりうほり
漢毛むすりくとお就房つりりく

六時礼讃　晋の惠遠禪師　また社とし

すのでまた漏とぞもく六時と礼
さへ六時念佛の擔興とく唐の善
導六時礼讃偈とくひのうのうて
日止乃勤りくと安樂、化うりく
りくへ是後たるくよとゆふかくま
安樂　はなづかくと住きあふとく

二十九後毛羽院六時別時念佛シ
くさり六時礼讃と唱てらやうの
ま職うんじやよえ女音ふくと
出家せし、後毛羽院大がくさん
もとて住き安樂と罪よとくま食
人秀穂と作、六糸川原とて安樂

と斬トスル　法名如願

毛泰

廣隆寺ハジ（泰良の人もてを

（とく）毛泰寺と云い　善親房

は事蹟

兩巻と下りうるそも毛

等、他へゆくことをほぞうする
觀房ノ不爲れ

千手の軒也念仏の事のうちも物と
人をもじとく

日本ハ秋也念佛

文永卷之院年号

如輪と人

ムルモニシカヘリナリトハスミ
シタクヤマリヘレタスミ

経觀 元亨款書云勝尾寺海堂觀音

像宝龜十一年七月十八日比丘妙
觀刻之千臂千目莊嚴巍々又加
四天王像凡五尊三十日而妙八月
十八日妙觀合掌而化觀音之靈
應也仲房榜外勝尾寺募緣疏
乞以觀雕像以付之

五宗内裏小大士とぞ有るをう薦す
仰みまづりてかみと人とも黙り
そ希代アシタラカムと人とも黙り
うめあつてかみと人しむれと

人のやまつひをうのうじをうと
ゆきこゑるゆくよれてゆくへ
ゆきこゑるゆくよんのうじをえん
しゆよく

みまの森

後醍醐院の皇帝う

といのはくわう

友人

赤城の
御林せわとお赤と云實よ

てへ功のうの被

軍乃別あ入道へひくに庵丁者也

りのうのうてひみえ難とく
ひけくみる人をあへあへ庵
さへもやくらへくもやくらへ
てんもいやとあめのうとあめ入
通ひのうとすりと百日川難とく
竹と今といたりくもとあめ入
てよきとんとくもくとく
はくとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとく

くへ多くてうんこひそくらんのむより
うんじある日ひ難とまんそとの西
あらわせりかりそくじんのく
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの
ゆくさりめくらわやうまの

でもうもつてきてもとまくらん
のくあゆとみくらんわじと
きてこまんとみくらんわじと
たことつとみくらんわじと

固別入石

基良卿 天祐二年十

一月十七日上辭狀シテガフスは名曰空

ウムラ

シヌ

夜丁

日本夜丁者ナガタサマノサマ

家八廣流山蘆中納言ノミコトノ庄子養生

主篇夜丁牛ウシ解クルと詳ハシよ書シリ

丁氏庵厨乃よとむて寧高
すゆよ庵丁と云

多きもの 情緒と云

百日の難 百日かる毎つてさて難

と云ふんとし

ぬうてよよせん

毛毛トヤツケ

そらんとし

ゆふを吸入送

西園寺公暉云

一茶相國とも云ふ

人よやくとせう

論清堯曰篇

往之与久也出納之各謂之有司
孟子曰丁以与丁無以与傷寒
すてんへまちを被うるやうのう
けんれそのんとあわ
うえとひたうりへやうへやう
とももも者ひそひてへそもとと
とわうへうり
えうの洋と民邑は師名也

ちのものとひそむるはれり
さとひるいりり男の中よあ
らすへゆううすもくへ抱あう
やがくとみとつりぬあう
筆をもくよくうきりゆく
ひきのまくとくうようほ
のえすうよやううくう
えもくの極へもくのよこやく
てようわかくわく人わくせき
くくくへとくのまくはく

もくみくもく

平家物語

ちく 柱はまくり乍してへこら
こしきしてへらくとしき
絆とのすまくり樂人のは世の
柱はまくりして柱は立つ
ひきとおりへく
多く生長とまでねくとく
もくわやくうやひく

もくわやくうやひく

人臣主とちりもくま
ありと、わしとくらべて、うりのもの
とあらてんとす。かくして、朝
すまうんぬへも、男女もが、皆さう
いふよ。されども、こゝへあらわ
るたる人のうちより、えひとすきだる
ときのうちのもの、そへうきだる
ゆゑにと、モウれでえうすう氣をして
人をもつて、うみとくらわう。

万のとうわ

論語多聞闕疑

慎言其餘則寡む又曰言忠信
行篤敬雜蜜顏之邦行矣

不善うろくうそ
ものうれぬうそ

神にて信うそとへ俗もとくらう
やううそとへみづうそとへも

人萬物と云ひ、もくいとあ
くもくうふいとんへあくまく
やううそとへみづうそとへも
みづうそとへもくまくとねん
みづうそとへもくまくとねん

カクモトタチハラ
人をもてんれむ
あくまつまづきのくも
かあさくすゑのくも
きくいづくのうよ
くのよあくはくのくも
よはくのうよ
やとせんじゆかくのくも
もくもくのう
とくとくのくも
たれとくれらる
とくとくのくも
くわくわくのくも
くわくわくのくも
くわくわくのくも
くわくわくのくも
くわくわくのくも

身のうへり又やんよへ色くらべ
ゆ色よすのいのれありてうかえ
よ色からうり

唐室 やどりくわくも
ゆふるくへり あうくふ
と云ひたして わんとあらふ
ゆめきへ胸ひしらしきそく
乃とへ入る

歌うう

白氏文集卷一函尾詩

集鳴松桂枝瓶藏蘭菊叢

うゑ

山彦 木神 空谷響

樹神 和名第二云文選善族時木魅

山鬼今案木魅吊樹木也和名
古方名也

又やんよへ

詠秀曰へ如明鏡室

六祖曰明境亦非臺 古德云胡來

胡現漢來漢現

丹波よしもとつ不あり人はとく

こくもと前まきへ秋乃きのうへ

とてゆるにゆきあひうづく都の
にゆりんうよと人ほゆ
うてわざわらう物つまくす
ゆねる事多とひのひの都
されうてられやひらうすきひの
にゆりんらうとひの
いふれをよしのすにひそむくひの
あつともひはううう亭性
うひまくううううう

よきりかく

大社

神名帳よへ多はとまちや

の國へ大社へ日本紀よへま齋島
ひす人已貴とまとひの御紙令よ
の素齋島うりとづくと又杵春明

神とそゑ

もとのまへ あらわ来へ

聖海上人

ひらかる
柳子猶太ヨウタ

やういとよすゆきのとてりぬよ
こころゆわくとくとくとくとくとく
つとてらくよとくとくとくとくとく
紙しきのりとくとくののつとくとく
うそとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
小鳥のあり能なとんとんりりりと
きてゆくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

柳子の歌謡集或勅召或又幽言の付

よはまよとすの臺うり柳
うそて山への木板半れ
伏流うるゝ縦舟とくくと
ひそむ冷泉のまよしらす
もしうるこえと光院のお船と
重半ふづきをぬりまわりを
おの半とりらの此の町に
をとゆりの重ノ月

二重石塔

勅旨や小説 世も寺へ行かれては無能

三重

中流を走り川とてセケ奈書
それんぐわすあらみの馬鹿うやう
ナウムトモセキマヌイタヌ
テリカヘキセカウ
人あまくアミテセルウラム
宮崎え院代毛とてわくと馬とく
うじとくと一か馬とくとくわ
をと馬とくとてあくとアヤクと
とととととととととと

ひりてとて馬とてのまへ
源氏のゆきのうちのへと見物のわや
うきよとくみる感

家勝光院

拾芥云法性寺建春

門院
は恵みの泰ノ重躬、信教シ

落馬（おちり）と、のうへり

（一）
神と社と一首歌をもつて
うりやんや（定めよ）うるの作り
まつ小松の葉の草（は）ねうたす
えりよあ（も）く神とさん（うん
とゆきへやすうりうの（えと）やれ
うさぎ（せ）め（う）め（う）め（う）め
やと（は）な（は）な（は）な（は）な
お國（くに）の歌（うた）わ（うた）わ
うた

（二）
お詫（みこと）と（お）と（お）と（お）と
お外（ほか）

坊（ぼう）主（しゆ）の宿（しゆく）（宿）つる（つる）（つる）（つる）
て（て）（て）（て）（て）（て）（て）（て）
万里（ばんり）の河（か）（か）（か）（か）
（か）（か）（か）（か）（か）（か）（か）

（三）
師（し）伝（でん）（傳）（傳）（傳）（傳）
（傳）（傳）（傳）（傳）（傳）（傳）

惡（あく）驚（きよ）之（の）奈（な）（な）（な）

傷（いた）（いた）（いた）（いた）

古今（きんこん）を（を）（を）（を）（を）（を）
志（し）（し）（し）（し）（し）（し）

九系相因

江房　也當寺行滿三十載

孫や姪等の息の行平才(イカシメ)日

模範

校刊

行の言庚韻

小毛陽歌文

之へ行列れ候（致候）て、御詔
徳行ノ如く、實にて極り、教書大
くよる。庚辰ノ月、下陽候され
り。身も心も、

人やまくまでこ藩に在りたる
よ様の事行當りし朝に従う
あらまえきわう作程はるる
うのうてよ支やへと申爲
うと嘗信し
成り
書立へんとひづる
ちりけりきのとてつむぎの
とてのひておんじゆる

うへみる身へ

ニ峰　山門入東塔西塔横川へ

きめいに

アリキ院

作伊　正三位元也宰大教泰終院
ノ小男ノ又孫一名院也延年七
月晦薨^ス立十五歲名補^ハ

江成　正二位也宰權帥行而言行
成多轉院即天祐二年誕生後
一系院方も此年二月薨^ス立十六云卿
補任

信者　姓名ハトヨ友信と書達^ク位

黙^{タム}

那蒙院寺にて西服も^{アリ}法服^{アリ}小
八束^{アリ}とソヌとモミテ附、右引え附と
アリと左化^{アリ}モウタリ^{アリ}トヨヒリ
のシラフ^{アリ}トモ^{アリ}ヤハシモ^{アリ}
ツツク^{アリ}トモ^{アリ}ウリ^{アリ}

那蒙院寺

通眼^{スル}トヨシモ^{アリ}

八寶　要歡苦樂寺同出息^スと八宝

云凡^{アリ}本教^{アリ}

花　印を終化と云ふ事ある

不花と云ふ

眞物信ふよゑうのてかお番みとる
一ふ陣の外す　信教んとへ帰
しとくりりりりりりりりりりりり
あううちれわらてりりりりりり
そそりそそりそそりそそりそそり
かきかきかきかきかきかきかき
まよまよまよまよまよまよまよ
やそそそそそそそそそそそそ
眞物信ふ　醜船はと室院(日那家)

久々

ひるゑみ

五月八日　うすりあるる

まよてうきのわくとほせうと云ふる
よしあはうわねううかとへ帰ふと奉
けりねとへりおのこ業(い)業(い)業
とひ業(い)業(い)業(い)業(い)業(い)

二月また日もとれあらうとてすら
マシムヌウカツテラヤムトモレ
小屋うすすらひぐりう

アラタニイのアラタニイのアラタニイのアラタニイ
アラタニイのアラタニイのアラタニイのアラタニイ
アラタニイのアラタニイのアラタニイのアラタニイ
アラタニイのアラタニイのアラタニイのアラタニイ

千人寺
歎迎會（二月十六日）

卷之三

八月十九日から十一月三日まで
高野山の山中で作成

卷之三

卷之二

東方七星角

星角亢氐房心

竊 東方、七星角亢氐房心尾箕
北方、七星斗牛女虛危室壁西方、
七星奎婁胃昴畢觜參南方、七
星井鬼柳星張翼軫正月一日よ

正月十二日
御上りて女入高と一星
つて毎日よわくとも人の高とこと
伏見のうきしりあら届よへ女入高
と御事して日教よ配と日本か(吉
備)云わぬうつとて別よ云ひ
うきしりあら届よへ女入高と
正月十二日

高ちうと中と塗のて大七高
とせり今スルノハリ八月十八九
月十三日未よあくらりに氣好
牛高シ除火の事と見ひてあ
ナシト八月一角二丸三疊四房
立心六尾七具八斗九女十處十一危
十二室十三壁十四奎十九畫九
月一丘二房三心四尾立具六斗七
女八唐九危十室十一壁十二奎十

三妻妻者清明未考之

ああお浦のあさのうづりもでや
くみのほどのもくらんもとくんふう
きにんの色とくわくじへゑと
くまうのまきとくくにとくく
あわやとくてもくく
よじくとくとくにぬるうづく
だわくとくあくけくに老けし
うかのうやまくうく
よきとくとくあくうくとく
くくのうとくとくあくうくとく
くくのうとくとくあくうくとく

きよみがへじゆのゆふとれど
くわくわくんりとわるくめ梅の花
かづりすやのわづら月よだもと見
れうるはる分そんまののくと
あさよそのとくとくとくとくとく
色こよのんよの

信之浦 奥羽よ信之那う整す
奥羽よ信之那う整す

もくもくとくとくとくとくとくとく
もくとくとくとくとくとくとくとく
ひき鳴のくとくとくとくとくとく

西行 源氏物語 もう

しゆゆを しゆゆを 暖む

ちく ちく

おれえふりふまきへくゆく
やまことともくくまく
えれ 晴布へくまく
せくまく

おれえふりふまきへくゆく

鞍馬山へ別上さる

是事(

とおれ

而後會(

を既

而後

くる人

墨人(

さそりあへ

古今小町(うきこみち)

従つて(かづて)は(は)ちの程と絶

ち(

カタチ

遊仙窟よ恵(めぐら)しまう

嫁(いと)や人(ひと)ハ(は)ね方(かた)へ(へ)ひ(ひ)く(く)る

と(と)て(て)嫁(いと)姻(いと)と(と)く(く)

わのまゆ

主(ぬし)と(と)き(き)う(う)ま(ま)そ

よ(よ)そ(そ)と(と)く(く)

あ(あ)ひ(ひ)く(く)の(の)よ(よ)

お(お)ひ(ひ)く(く)の(の)よ(よ)も(も)と(と)く(く)

お(お)ひ(ひ)く(く)の(の)よ(よ)う(う)く(く)

わ(わ)か(か)

情(じやう)の(の)よ(よ)う(う)い(い)

物(もの)の(の)う(う)り(り)の(の)う(う)

は(は)な(な)や(や)ほ(ほ)

まことに御心地
おもてなしの心

みくわる
伊豫カ
お和ハシマノ昔人皇
りの重カミのんシタ、
いのちのうシテ小玉
かへとへかのまヤハシ、金葉集

て死ぬまでよき人間ともいふるに
あらんよおもしろうからかと申候平生
乃翁のうへて生れずよりのまゝ
うして後もかくはよきと云ふと
よ病と云ひて死門よじじれ不終一
死とあやひつひりて年日へ悔意
と悔てゆきひづれひづれて今と
ももせへばとよつてこゆるのみ
わざとくとくとくとくとくとくと
とやうぢりのれへねよへんうらえ

今日の天氣は晴れ
易々卦

云月盈則食^ス秋名曰月^{ハナ}爾也滿^ル
則缺^{ハカツ} 曰^{ハシマ}月滿之名也日月遼
わらひ者也

妙幻の生 金剛陀羅尼如夢幻泡影
妄想 七葉禪師曰真妄也とわうと
妄中圓妄よ徳也とわうと
放下 梵語より放下若とはくすうと
放下

蒙古語
蒙古文

すくまくとくとくじりやじゆ
一樂歎すくとく一トトムアラクス
ニ音わうりけむとヤ氣とのがよんう
ニアヘタ歎ことへゆうううのゆ
みのこよへもんも頗倒のあく
あくしてそここのうのうのうのうのう

蒙古文
長水會
烏拉八德

須
逐項道在其中，動靜寒溫自愧自悔。_二

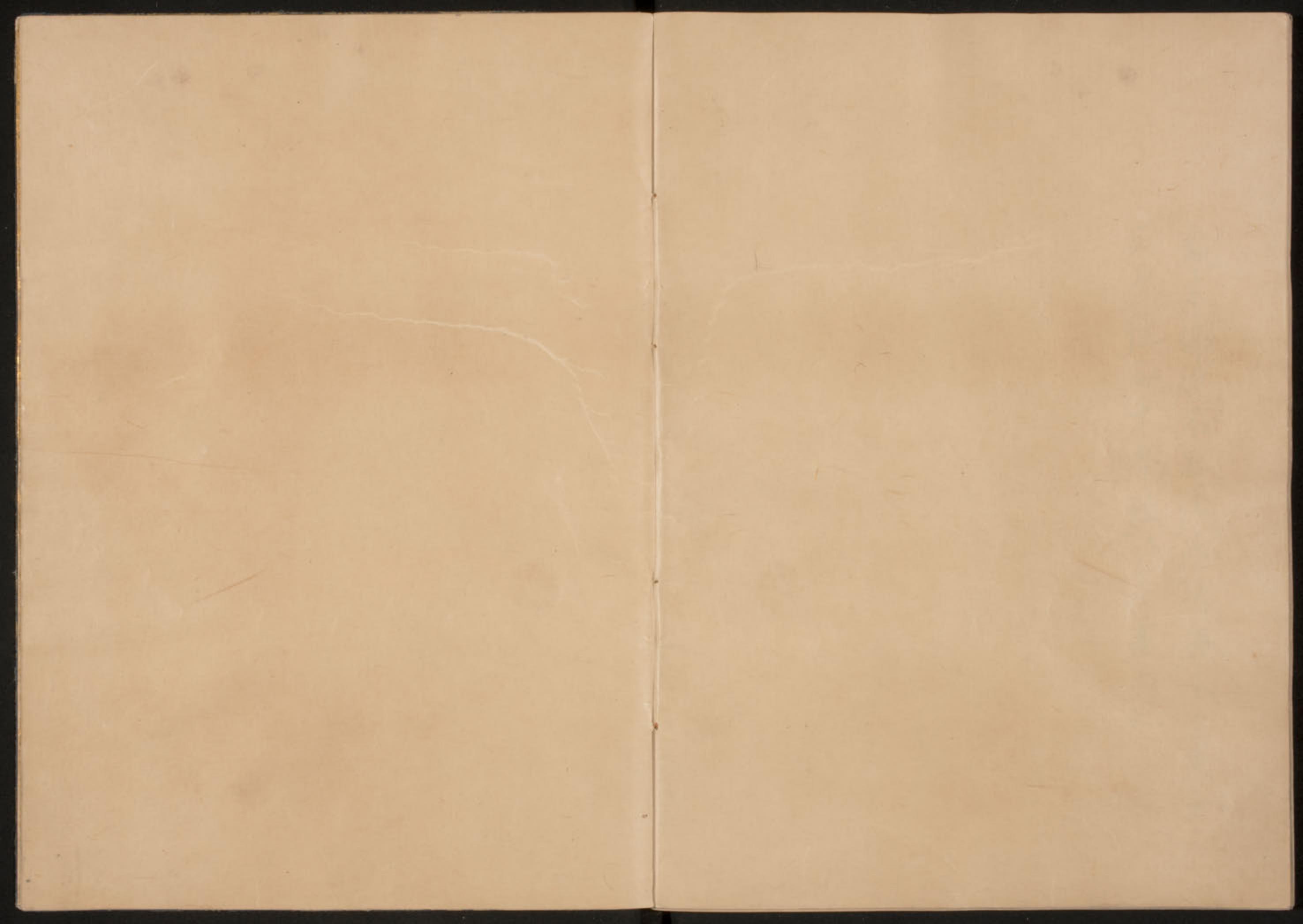
二五六色欲之味
札記曰飲食男女之大欲存乎

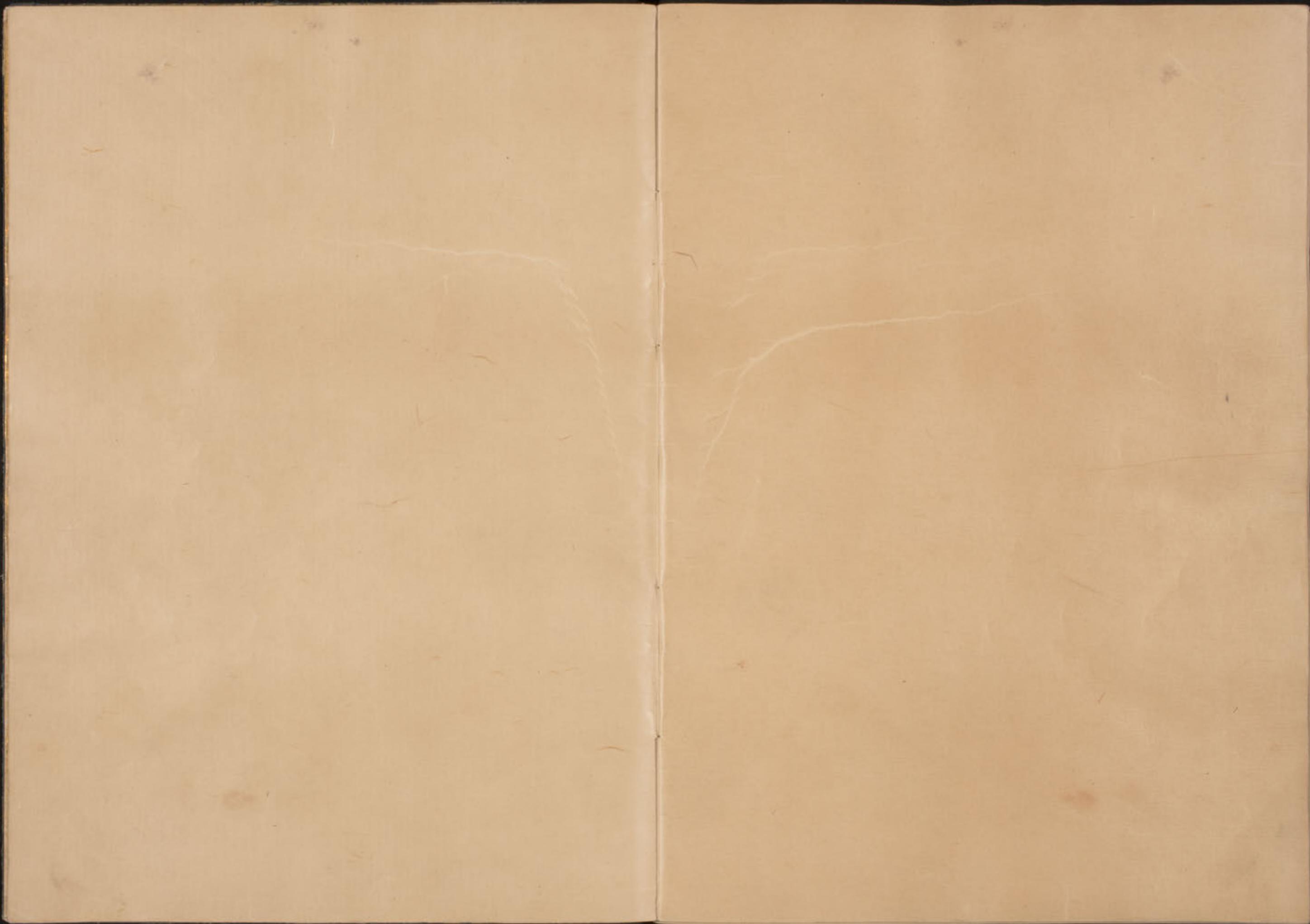
又言「りやうりんも「りやうじ
クルといひのとく」人のはりまきて
えあへとさりゆつとほんよかうり
てお」

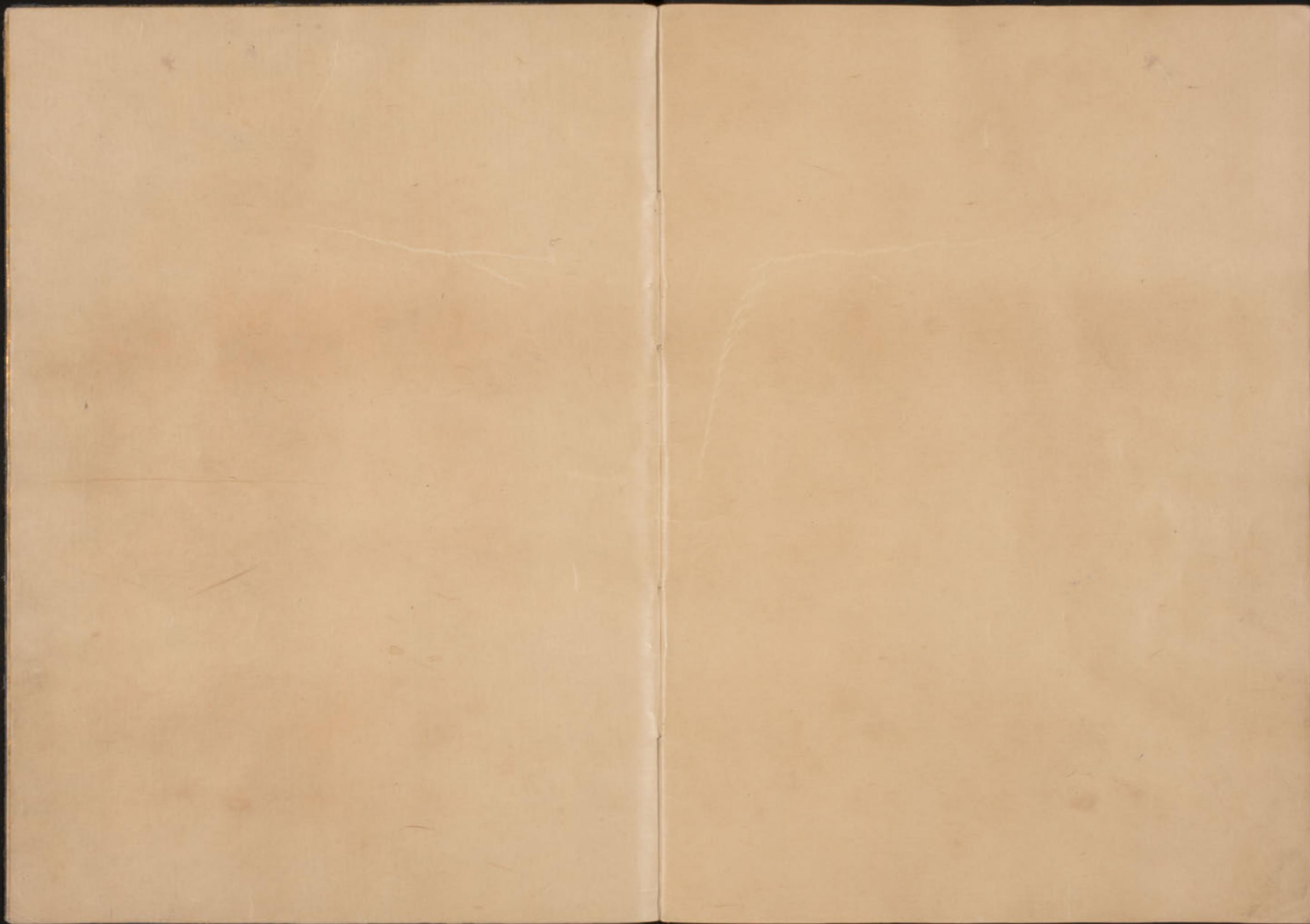
佛說三身壽量無色經曰文殊白
佛言我等從昔聞如來說法以何
仙乎此說法佛告文殊言已四十一
重內大院東大艮窟遮那說法文殊
重白佛言四十一重內大院何者是耶
世子後言已十住十行十迴向十地等

覓內大院東妙覓地大艮窟遮那
說法文殊重白佛言妙覓地艮窟
遮那從何佛來說法世子後言妙
覓地艮窟遮那無始、終一心一念
本佛說法文殊重白佛言無始、終
一心一念本佛、從何佛說法世子後言
無始、終一心一念本佛、是無心之念本
佛說法文殊重白佛言無心之念本
佛說法文殊重白佛言無心之念本
上更無佛陀云前佛無後佛、無心無

念本佛以不思議為體無^{トテ}本去來^{シテ}
三身性^{トシノシテ}三十界性^{トシヨリシテ}今畫不記







62
10
4

1
10
4

110X
516
4

